

寒滞肝脈の治法 大建中湯の応用について

峯 尚志



寒滞肝脈とは

- 肝経の経絡に沿った冷えをともなう痛みで、寒邪の侵襲によって生じる。寒冷による血管収縮・筋肉の緊張・平滑筋痙攣が関与すると考えられる。肝の経脈は外陰部を絡い、両下腹部から上行して両脇に分布するので、肝脈が凝滯すると両下腹部から陰部にかけての冷えと痛み・陰嚢の収縮・四肢の冷え・寒冷を嫌う・舌苔が白滑・脈が沈弦あるいは遲などを呈する。
- 治法は**温肝散寒・理氣止痛**。吳茱萸・小茴香・肉桂・高良姜・乾姜などの温裏散寒薬に、烏藥・木香・川棟子・檳榔子などの理氣薬を配合する。
- 処方穴 中極（灸） / 足三里・三陰交・太衝



寒滯肝脈

疝氣、腹痛、痛經の疾病中にみられる

- 寒滯肝脈証、是指寒邪內侵肝經致疏泄失常、**氣血凝滯**而以少腹寒凝氣滯疼痛為主要表現症候

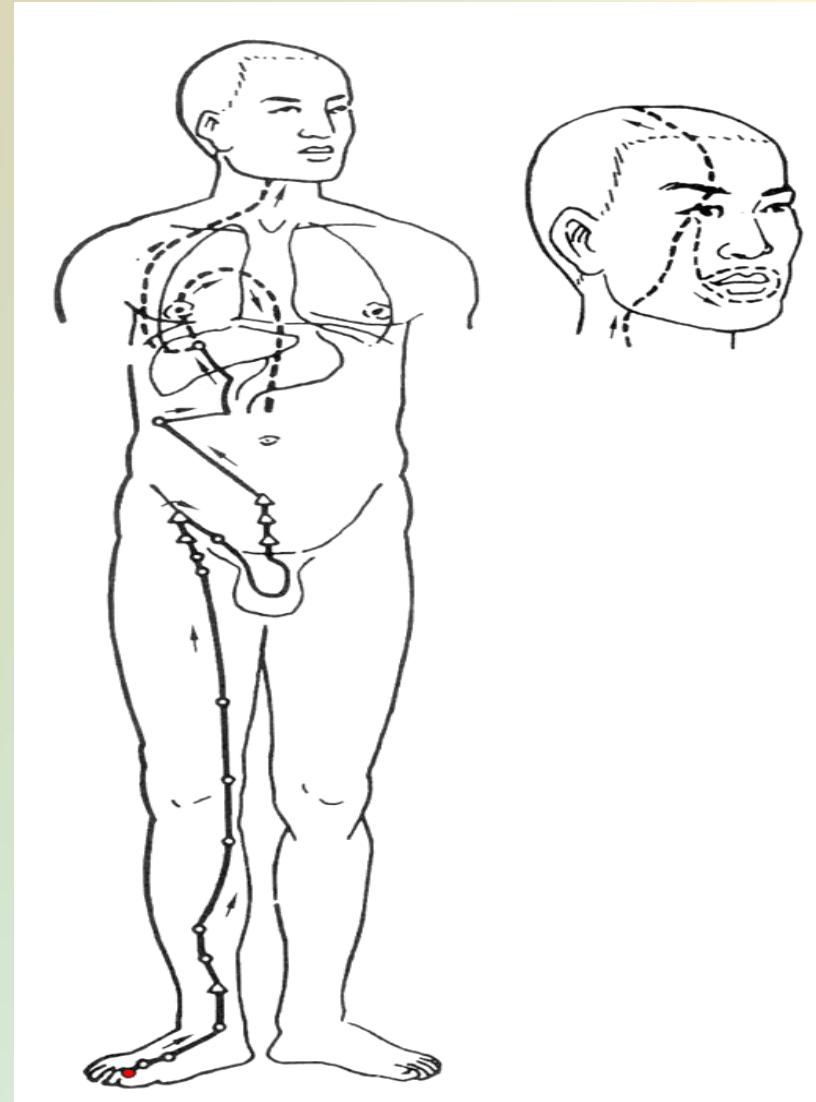


臨床症状

- 少腹冷痛 下腹が冷えて痛む
- 陰器収引疼痛 陰部のひきつるような痛み
- 頭頂部の痛み、寒さに会うと増悪し、温まると軽くなる。
- 悪寒して四肢が冷える。
- 嘔吐して薄い唾液を吐く。
- 小便の色は薄く、量が多い。
- 女性は帯下が薄く冷たい。月経痛がある。
- 舌苔白滑、脈沈弦あるいは沈緊にして遅
- 寒邪犯胃証と肝陽虚症との鑑別を要す。



足の厥陰肝經



代表处方

- 当帰四逆加吳茱萸生姜湯
 - 当帰3、桂皮3、芍藥3、木通1.5、細辛2、甘草1.5、大棗4、吳茱萸2、生姜1
- 暖肝煎
 - 枸杞子9、当帰6、小茴香6、烏藥6、茯苓6、生姜3、桂皮3、木香（沈香）3
- 天台烏藥散
 - 烏藥15、木香15、小茴香15、青皮15、高良姜15、巴豆15、川楝子12、檳榔子9
(オレンジは温経散寒薬、下線は理気薬)



大建中湯 金匱要略

- 蜀椒3g、乾姜4.5g、人参6g、膠飴30g
- 効能：温中補虛、降逆止痛
- 主治：中焦陽虛、陰寒上逆
- 腹痛、腹満、嘔吐、不食、腹壁上の蠕動望見、舌苔は白滑、脈は細緊、甚だしければ四肢が冷えて脈が伏。
- 病機：陰寒の邪が氣血を凝滯させるので、激しい腹痛を生じ、濁陰が上逆するため嘔吐して飲食できない。



《医方集解条文》

- これ足太陰、陽明の薬なり
- 蜀椒は辛熱、肺に入りて寒を散じ、脾に入りて胃を緩め、腎命に入りて火を補う
- 乾姜は辛熱、心を通じ、陽を助け、冷を逐い、逆を散ず
- 人参は甘温、脾肺の氣を大補す
- 膠飴の甘はよく土を補い、緩にして中を和すべし
- けだし、人の一身は中氣を持って主となす。辛辣甘熱の薬を用い、その中臟を温建し、もって下焦の陰を大去して、その上焦の陽を復すなり



症例 58才、男性

前立腺肥大、尿道の痛みと痺れ



現病歴

主訴)

排尿時の痛みとしびれ

X年3月初診

5年前より前立腺肥大で治療中

夜間排尿1～2回、尿道のしびれ感、
排尿後痛を訴える。鎮痛剤は効果なし。

PSA1.1で異常なし



現症

身長177cm、体重63kg、痩せ型
脈は沈細
舌は淡紅色、白苔
腹部は腹力2/5で臍下不仁を認める
お腹、下肢が冷えやすい
疲れると眼がかすむ



エコー所見



前立腺中等度肥大、膀胱に向かって隆起している



経過

- 以上の所見より、ツムラ牛車腎気丸エキス 7.5 g、大建中湯エキス 15 g 分 3、猪苓湯合四物湯エキス 5.0 g 分 2 を処方。
- 服用後、排尿後の痛みが劇的に改善し消失した。現在牛車腎気丸 5 g、大建中湯 5 g、猪苓湯合四物湯 5 g で経過観察中。尿道の軽い痺れのみ残っている。



処方の選択について

- ・腎陽虚、裏寒、寒滯肝脈、膀胱湿熱、血虛。
- ・本例では本体を腎陽虚、裏寒、寒滯肝脈と弁証し、牛車腎氣丸に大建中湯を合わせて処方した。エコー所見のように前立腺の肥大と膀胱の圧迫がみられ、尿勢の勢いがない臨床所見も踏まえ、猪苓湯の適応と考えたが緩めて通すことを考え四物湯を合方した猪苓湯合四物湯を加えて処方した。寒滯肝脈の常用処方として当帰四逆加吳茱萸生姜湯を考えるならば牛車腎氣丸、当帰四逆加吳茱萸生姜湯、猪苓湯と組み合わせることも可能である。



症例 89才、女性

- 主訴) 繰り返す膀胱炎
- 現病歴) H27年11月より、月に3回程度、膀胱炎を繰り返す。
- その都度、抗生素が処方されるが、再発を繰り返している。抗生素ばかりのむのは、不安にて来院。排尿困難がある。
- 既往歴) 糖尿病、高血圧、甲状腺腫,83才で子宮脱ope



経過

気虚下陷証、裏寒として
補中益気湯7.5 g、大建中湯7.5 g、猪苓湯7.5 gを処方する。
受診前は月に3回ほど膀胱炎を起こしていた。この処方で現在のところ、4か月、膀胱炎症状が起きていない
泌尿器科の主治医から当院の治療のみ続けるように言われた。



症例 32才女性

- ・X-1年12月より両側鼠蹊部の痛み、ピリピリ熱い感じや、圧迫感、下肢の痺れや手足のしびれを自覚する。
- ・消化器内科、婦人科、神経内科で精査するも異常なしといわれ、ブスコパンやロキソニン、胃腸薬などを処方されるが全く改善しないためX年7月当院を受診する。



現症

- ・やや痩せ型の女性
- ・脈は沈、細
- ・腹部は痩せて脂肪少なく、
- ・腹力2/5で腹直筋は薄く緊張している
- ・月経は28日周期。月経痛はやや強い。
下肢の冷えを自覚する



経過

- ・以上の所見よりツムラ当帰建中湯エキス7.5g合大建中湯15gを処方。
- ・服用後数日で鼠蹊部の痛みはなくなった。その後当帰建中湯を桂枝加芍薬湯、当帰四逆加吳茱萸生姜、吳茱萸湯などに変方するが、当帰建中湯の組み合わせがもっとも調子が良いと報告している。



大建中湯 1

- 「大建中湯」は温中補虛止痛の効能を持ち、陽虛寒盛による腹痛を治療する処方である。古文では、寄生虫による腹痛を治療する代表処方
- 脾虚寒盛の便秘に用いる腸の動くをよくし、寒凝を駆散する。現代ではイレウスの治療薬として有名。
- 臓腑弁証から見ると、脾を中心治す処方であるが、山椒、乾姜、人参は肝厥陰病（肝）を治療する「烏梅湯」に配合されており、肝の寒盛症状に併用することもできる。



大建中湯2

- 大建中湯の腹痛の部位はお臍を中心に全腹痛
- 両側の痛みに対しては、肝の引経剤も考える
- 例：肝氣鬱結⇒四逆散
- 肝寒⇒吳茱萸湯
- 肝血虚瘀⇒當帰芍藥散
- 鼠蹊部は肝を中心に考えることが多いが
臓腑の機能からそれぞれ代表する部位を強調する。
- 胃⇒上腹部 脾⇒全腹部（大腹）
- 肝⇒両側 腎⇒後ろの腰部



寒滯肝脈の基本処方

暖肝煎

- 《景岳全書》卷五十一（明代1642年）
- 当帰6～9克 柚杞9克 茯苓6克 小茴香6克 肉桂3～6克 烏藥6克 沉香3克(或木香亦可)
- 水300毫升，加生薑3～5片，煎至210毫升，空腹時溫服。
- 【功效】暖肝溫腎，行氣止痛。【主治】肝腎陰寒，小腹疼痛，疝氣。
- 【加減】寒甚者，加吳茱萸、乾薑；再甚者加附子。



まとめ

- 寒滞肝脈は、寒邪が内向して肝経にいたり、肝経に沿って気血が凝滞して冷えや痛みを生じる病態である。
- 腹部に於いては、鼠径部に沿った痛みがある場合、寒滞肝脈の存在を疑う必要がある。
- 治法として肝経を温める生薬である当帰、吳茱萸、乾姜、茴香、山椒などが用いられ、方剤としては当帰四逆加吳茱萸生姜湯、暖肝煎などが用いられる。
- 今回は、乾姜、山椒を含む大建中湯が寒滞肝脈に有効であった経験をしたので報告した。

